

135. 昭和59年度滋賀県下における発掘調査の紹介 その2

13. 古代の村落を検出

豊郷町大字雨降野 雨降野遺跡

県営は場整備事業に伴う調査で、昭和59年6月から実施した。当該地は犬上川によって形成された扇状地に位置し、立地形態は甲良町法養寺遺跡に似る。

検出された遺構は竪穴住居3棟、掘立柱建物約7棟、溝5条、土壌十数基などである。

竪穴住居の平面形はすべて方形を呈し、隣接する2棟は北壁部中央にカマドをもつ。主柱は4本認められ、1棟は建て替えの痕跡をみる。竪穴住居の北西側には南東から北西へのびる溝がはしり、住居区を区画する溝と考えられる。

掘立柱建物の柱穴は平面方形の掘形をもつもの、円形のものがあり、方形掘形の建物は柱筋を揃え規則正しく構築されている。円形掘形の建物は全体に歪みがあり、上記の建物より規模は小さい。検出された建物の中で、方形掘形をもつS B101は3間×2間(3.8×4.45m)の規模をもつ総柱建物で、梁行の方が長い。東柱は平面円形の小柱穴である。

土壌はいわゆる風倒木によって形成されたもので、黒ボクが馬蹄形に堆積する。建物と重複するものはない。

遺物は7世紀後半から8世紀後半の土師器、須恵器類と9世紀の灰釉陶器がある。遺物の共伴関係から竪

穴住居は奈良時代前期に、掘立柱建物は奈良時代中葉以降の時期に相当する。

以上のことから、雨降野遺跡は風倒木等から勘案すれば森にかこまれた古代の村落であったと推察される。ただ、それが犬上郡に施行された条里制地割といかに関わるか、また、当遺跡周辺に認められる犬上郡条里と方位を異にする方格地割とどのように関係するか、他の遺跡と比較検討を行い、村の位置づけ、地域史的構造を明らかにしたい。(滋賀県教育委員会 葛野泰樹)

14. 奈良時代の集落跡を検出

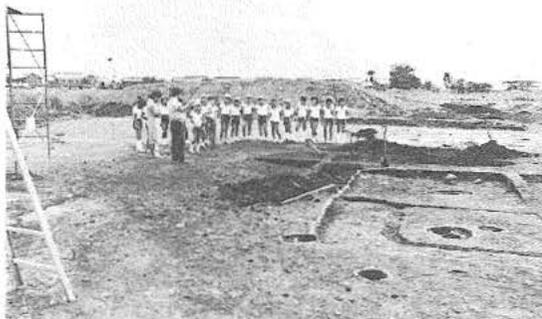
甲良町尼子 尼子南遺跡

本調査は県道工事に先立ち、昭和59年10月から60年3月まで実施したものである。調査面積は約2500㎡である。

当遺跡は犬上川左岸に広がる肥沃な沖積平野上に位置する。主な検出遺構は竪穴式住居12棟、掘立柱建物10棟以上、溝1条、土壌墓2基などである。このうち土壌墓は平安時代以後に比定され、他の遺構のほとんどは7世紀後半から8世紀後半に該当する。

竪穴住居はいずれも平面方形を呈し、その規模は一辺約6mのものから一辺3m弱のものまで様々である。遺構の遺存度は良いが主柱穴は明確に検出されず、主柱穴と推定される柱穴も浅い。また、カマドを伴う住居が5棟確認され、一棟はコーナー部分にあり、煙道も遺存する。他は竪穴中央部分に設置されている。

掘立柱建物もその規模は多様で、東側と西側の建物規模には相違が認められる。東側では5間×3間の南北棟と、その北西の2間×2間の総柱建物はL字形に



遺跡見学風景



掘立柱建物(南東から)

配置される。また他の建物も規模は大きく、方位・建物配置等に規則性が認められる。柱掘形は1辺約1mの隅丸方形を呈し、深さは0.6~1mを測る。西側の建物の柱穴は小さく平面円形を呈し、規模は東側に比して小さく、重複する建物もある。

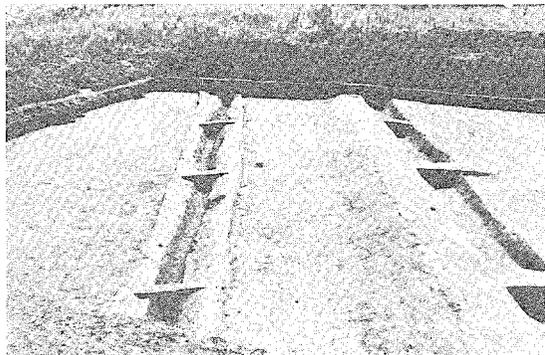
主な出土遺物は竪穴住居から須恵器、土師器、またトレンチ中央部の土壌から近江型とされる土師器の長胴甕が、ほぼ完形品で検出された。土壌墓からは土師器皿や山茶碗の出土をみる。

以上のように、当遺跡は奈良時代前期から後期に営まれた集落跡である。特に、時期を相前後する竪穴住居群と掘立柱建物群は、古代、湖東地域における集落形態や住居構造の変遷を考える上で、注目すべき資料である。(滋賀県教育委員会 葛野泰樹)(植田文雄)

15. 条里制施行の問題に新資料

愛知川町市・沓掛 市・沓掛遺跡

両遺跡の発掘調査は、団体営ほ場整備に伴うもので、市遺跡は今年度3年目を終えた。沓掛遺跡については今回、始めて調査を行った。現状景観として残る条里遺構との関連から両遺跡を考えることにして、ここでは共に、調査の概観を述べることにする。両遺跡はおよそ、古墳時代後期から奈良時代にいたるものと考えられ、竪穴式住居跡、溝、土壌、掘立柱建物等からなる。当該地は、犬上・愛知・神崎の3郡に及ぶ、東へ31~32度傾斜した統一条里と、南北方向を基軸とした「古条里」と呼称される条里的地割が施行された地域である。市遺跡はそのうち「古条里」の残存が想定される地域で、前年、今年度の調査を通じて、土層内より現状畦畔に重なる畦畔を数本検出した。またそれに平行して流れる溝も確認された。「古条里」は、これまでの調査研究から統一条里に先行するものであり、おそらくは、下限を白鳳末期とし、使用尺度を秦漢尺とするといった見解が出されている。しかし、前回、今回の調査を通じて、計画的な条里畦畔が想定されないことや、溝からの出土遺物から年代観がずれることなど、



検出した溝

今後の調査の課題として浮び上がってきた。沓掛遺跡は、3郡にまたがる統一条里施行区域内にあり、奈良時代後期の掘立柱建物、溝等を検出した。数郡にわたる大規模な条里施行の年代観については、犬上郡水沼村、天平勝宝3年墾田地図に条里畦畔が記載されていることから、それ以前に「条里プラン」が完成していたことが考えられるが、今までのところ上限を決定する資料を得ていなかった。沓掛遺跡での今回の調査結果は、それに対して、年代観を示す一つの参考資料となる可能性もある。以上、市、沓掛両遺跡は、条里制施行との関連から、律令時代の開発の様相を考える資料となるのではないと思われる。

(愛知川町教育委員会 西田 辰博)

16. 縄文晩期の土器棺墓等の検出

五個荘町木流 木流遺跡

木流遺跡は、愛知川が箕作山塊に当たって流路を北西に大きく蛇行させた所の左岸扇状地であって、標高115m前後を測り、付近には吉住池や西の沢などの湧水地や低湿地が見られる。遺跡は、この湧水地に臨む微高地に古地している。周辺には八日市市上日吉遺跡や五個荘町平阪遺跡等の弥生時代から平安時代にかけての大集落跡が蟠集し、また、白鳳期創建の寺院跡と目される木流廃寺も、本遺跡の西側に隣接している。

団体営ほ場整備事業に伴う発掘調査で、縄文時代晩期の土器棺墓1基と、古墳時代後期の竪穴住居跡5棟分を検出した。土器棺墓は、直径50cm程の浅い土壌を穿ち、口縁部を二重の凸帯で裝飾した深鉢を、2個体合せ口として土壌底に斜行して安置したもので、底部側の土器は、口径25cm器高36cmを測る。棺内には、骨片等は遺存していなかった。竪穴住居跡は、検出した5棟の内、完掘し得たのはS B 01とS B 03と呼称する2棟である。概略を示せば、S B 01は南北4.4m東西4.7mの方形プランを呈し四柱構造で、住居南壁面中央に造り付けカマドがあり、北壁の西寄りに長方形の土壇が見られ、貯蔵穴かも知れない。住居床面の中央部は



竪穴住居跡

固く踏み締まり、その中央に長径40cm程の扁平な石が据えられ、その上面は使用痕により磨滅していた。時期は6世紀後葉に比定できる。なお、長方形土壇に接して長径60cm程の楕円形土壇が検出され、底部より骨片が採集されたが、住居に伴うものかは不明である。SB03は、南北7.0m東西6.3mの規模を有する比較的大型の方形住居で、四柱構造を有し、東壁中央に造り付けカマドを付加している。住居の床面は、壁面の四周幅1mほどが、床面より20cm程高くなっており、所謂「ベッド状」を呈している。カマドの南側には、一辺1m深さ50cmほどの方形土壇があり、土壇底部から須恵器杯・土師器長頸壺が出土し、貯蔵穴と見て大過なからう。この住居からは、比較的多量の土器が出土しているが、中でも、カマドの北側のベッド状部分で、口径20cm器高33cmで容積9.5ℓを測る土師器甕2個体が並置した状態で出土したのが注目される。時期は、6世紀前葉である。

以上、木流遺跡は、縄文時代と古墳時代～平安時代の二時期にわたる大集落であることが窺い知れた。特に古墳時代後期の集落は、同時代に属する平阪遺跡などと共に、同地域の首長墓クラスの前方後円墳に比定される、南1.1kmに位置する伊野部山の神古墳の造営に深くかかわっていたものと理解できよう。

(五箇荘町教育委員会 林 純)

17. 古道(中山道)沿いに開けた奈良・平安期の掘立柱建物集落

安土町東老蘇 立宿遺跡(II)

立宿遺跡は安土町大字東老蘇字立宿に所在する古墳～奈良・平安期の複合遺跡であるが、当遺跡の北方約300mには古道(中山道)が東西にのびており、当地先の字名とも考え合わせてここに何らかの宿場施設の存在が想定されるところでもある。

昭和56年に実施された「立宿遺跡I次調査」によれば、古墳時代前期に相当する2棟の竪穴式住居とこれを切る形で検出された6棟の掘立柱建物(このうち2



掘立柱建物

棟は倉庫と思われる)などが検出されているが、奈良・平安期のものと考えられる遺構としてはトレンチ南部で検出の自然河道のみであった。

今回の調査位置は、I次調査の北側隣接地にあたり、老蘇農業協同組合による大豆乾燥施設建設に伴って実施されたものである。検出遺構としては奈良時代に想定される掘立柱建物4棟の他に、これよりは時期的に古い溝状遺構などがあげられる。掘立柱建物はSB1(4×3間)、SB2(3×3間・西面に1間分の扉付き)、SB3(4×2間)、SB4(2×1間)と規模は様々である。このうちSB1、SB2、SB4は主軸がほぼ同方向を示しており、SB3のみが他の3棟に比べ若干方位を東へ振っているようである。またSB1、SB3は切り合いの関係にあり、その前後関係については今のところ不明であるが同位置での建替えと思われる。

これらの掘立柱建物群は前回の調査にて検出の掘立柱建物ともあわせて推測するに、奈良期における中山道沿いに立地する街道集落であり、近江八幡の馬淵・武佐と五箇荘の清水との中間にあって八日市方面への分岐点ともなる宿場的な機能を持つ集落ではなかったと思われる。

当区域と中山道との間にあるほぼ300mの空白を埋める遺構の推定と古代における駅制などとの比較検討を加え、今後の精査に務めたい。

(安土町教育委員会 石橋 正嗣)

18. 古墳時代の竪穴住居群

安土町慈恩寺 慈恩寺遺跡

昭和59年度県営は場整備事業に伴う安土町慈恩寺遺跡の発掘調査を昭和59年5月から12月まで実施した。過去2次にわたる調査で当遺跡は古墳時代～室町時代の集落跡であることが判明している。今回の調査地は前回調査地の南側の微高地で、遺跡の範囲の拡大が予想された場所である。調査面積は4500㎡で検出された



土壇群

主な遺構は次の通りである。

〔竪穴住居〕調査区はほぼ全域で合計16棟検出された。これらに伴い古墳時代前期の土器が出土している。大半が隅丸方形若しくは方形のプランを有し一部の住居跡からカマドの痕跡が検出されている。

〔土壇(墓)群〕今回の調査地の南西部に設けたトレンチにおいて、2条の溝に挟まれた部分に、土壇が計73基互いに切り合う形で検出された。大半の掘形が「袋状」を示し、一部の埋土に焼土が検出されている。埋土中より若干の土師皿・黒色土器等が出土しており、これらよりこの土壇群は平安末期～鎌倉時代のものであると考えられる。

〔溝跡〕各トレンチにおいて20～22条の溝跡が検出された。これらは埋土、遺物から見て、中世と古墳時代に大別できる。特に後者の中には土器を多量に含むものもある。

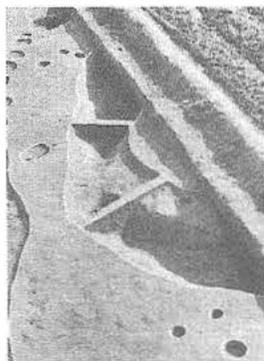
上記の他、古墳時代前期の土器を多量に含む土壇などが検出されている。

今回の調査は主に排水路敷を対象に行った為、線的な調査となり、個々の遺構の形態、規模等詳細は不明な点が多いが、当初考えられていた慈恩寺遺跡の範囲はさらに南部、西部に広がり、古墳時代前半の集落跡、中世集落跡(荘園関係か)、中世寺院跡(慈恩寺・金剛寺関係)等の時代性を有することが判明した。さらに、当遺跡の南に位置する中屋遺跡との関連等、今後の調査が注目される。(安土町教育委員会 西家 淳朗)

19. 弥生時代後期の方形周溝墓等を検出 近江八幡市千僧供町 白鳥川勸学院遺跡

近江八幡市千僧供町の白鳥川改修事業に伴う勸学院遺跡の発掘調査は、昭和58年度から59年度にかけて、馬淵小学校グラウンドの東地区、国道8号線南地区、および上流西岸地区において実施した。その結果、弥生時代後期から近世にいたる遺構を確認することができた。

小学校グラウンド東地区では、弥生時代後期に属すると考えられる方形周溝墓3基以上、奈良時代までに埋没したと思われる流路跡(旧白鳥川流路か)、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物3棟以上、溝などを検出した。方形周溝墓は、東南約0.5kmの堀ノ内遺跡の住居跡群に対応する墓域としての位置づけが想定される。流路跡は、上流西岸地区でも続きを検出して



方形周溝墓検出状況

いる。また、この地区では、須恵器坏身、鉄製鎌、滑石製小玉を埋納する小土壇を検出している。須恵器の形態より6世紀前半頃の遺構と思われる、何らかの祭祀にかかわるものであろう。

国道8号線南地区は、「堂ノ内」などの小字名が残されており、千僧供廃寺の推定地と考えられている場所であるが、後世の開発が著しく、寺院に関連する遺構、遺物は認められなかった。かわって、近代まで機能していたと思われる竹製暗渠を埋設する石組溝、石組井戸などを検出した。

勸学院遺跡周辺は、蒲生郡衙の所在が推定されており、また遺跡の北辺を旧中山道が東走するなど、古代より重要な位置を占めてきた地域である。今回、検出された奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物、豊富な遺物などは、その間の事情の一端をもの語るものであるかもしれない。

(勸滋賀県文化財保護協会 田路 正幸)

20. 中世の屋敷跡(館)

中主町吉地 吉地大寺遺跡

吉地大寺遺跡は、中主町吉地字豊屋敷を中心に所在する奈良時代から近世におよぶ遺跡である。

今年度の第7次調査は、個人住宅建設に伴うもので、約2400㎡を対象とした。今回の調査成果は、昭和56年より「中世の屋敷跡」ではないかとの推測のもとに進めてきた第1次～第6次までの調査に確信をあたえるもので、二重の堀に囲まれた鎌倉末～室町前半にかけての大規模な屋敷跡(館)の南コーナーと屋敷内の一区画を確認した。

検出された遺構は、平安時代の集落跡と考えられる掘立柱建物群と複合しており、無数の柱穴が切りあっている。この内屋敷跡の遺構としては、一辺50m余りを検出した幅8m、深さ2mと、幅3m、深さ1.3mの二重に巡る堀で、内堀の南コーナーは外堀のように連続せず一旦跡切れている。また内堀東側では、堀下におりることのできるテラス状の平坦地を1か所作って



検出遺構

いる。内堀内には、幅1m、深さ1mの溝で区画された一辺18m×25m、約450㎡の小区画があり、この区画内に井戸、土壌、建物跡等がみられる。

この屋敷跡は、昨年度に調査した光明寺遺跡内の屋敷跡とともにほぼ同時期の遺構であり、今後両遺跡の性格とともに調査成果によせる期待は大きい。

(中主町教育委員会 辻 広志)

21. 歴史時代の建物群

中主町西河原 森の内遺跡

本遺跡は中主町の区画整理事業に伴う事前調査として発掘調査を行った。調査対象は全て都市計画街路部分に当たり、総発掘面積は約8100㎡に及ぶ。

調査の結果、弥生時代前期から室町時代にかけての遺跡である事が判明した。

A区 室町時代を中心とした集落跡である。小溝による区画が設けられた建物群が4群存在すると考えられるが、下水道工事によりかなり攪乱されている為に明瞭に確認できるものは2群だけである。主な遺構は柱穴、溝、土壌、井戸等があり、各遺構内より土師器、輸入陶器、信楽、古瀬戸、五輪塔、漆器が出土している。

B区 上層において平安時代の掘立柱建物群を検出した。現在のところ明確に復元出来る建物は2×3間のもの1棟のみである。建物の方位は南北方向から東へ約13度振っている。同方向性をもつ溝も多数検出したが性格は不明である。出土遺物には土師器、須恵器、墨書土器(須恵器、灰釉陶器)、円面硯、古銭(隆平永宝)等がある。

下層では奈良時代の掘立柱建物群を検出した。建物は少なくとも10棟以上は存在したものと考えられ、2×3間、2×4間の規模のものが主に占める。特に注目されるのは掘方の一辺が約1.5mを測る建物の存在である。規模はトレンチ外へ伸びる為に判然としないが2×4間以上と考えられ、柱の抜き取り痕が明瞭に残存している。柱の直径は30cm以上と推察されるこの建



溝・掘立柱建物跡

物を含む建物群の性格については整理作業の進展を待って解明したいと思うが、当地においての有力者の居宅等とするのが妥当と考える。

(中主町教育委員会 山田 謙吾)

22. 古墳後期～室町時代の2層の遺構面

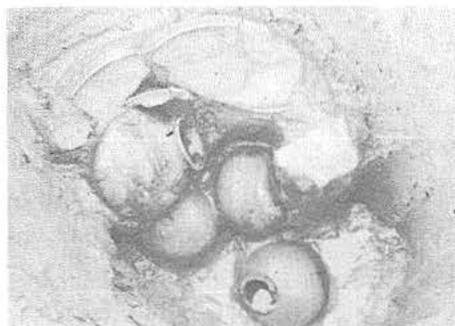
中主町八夫 八夫遺跡

中主町八夫遺跡は、野洲川の沖積地に立地し、現在の八夫集落の西北に位置する。調査は、農業用倉庫の建築に伴うもので昭和59年12月に実施した。

調査の結果、2つの遺構面が確認された。第1遺構面は、室町時代の井戸1基、土壌1基と数個の柱穴を検出した。第2遺構面は、平安時代後期の井戸1基、奈良時代の掘立柱建物1棟、古墳時代後期の土壌2基を検出した。

室町時代の井戸は、直径4mを越える大型で、掘形より常滑、信楽甕に混じって島尾、平瓦、古墳時代の須恵器が出土した。平安時代後期の井戸は、直径1.1m、深さ1mで土師器の小皿、黒色土器碗、灰釉、緑釉陶器などが出土した。

奈良時代の掘立柱建物は、掘形が隅丸方形で主軸を東に17度振るが調査地の関係からその規模は確認できなかった。その他柱穴に重複が見られることから2時期以上の掘立柱建物の存在が考えられる。古墳時代後期の土壌のひとつは、2.2m×1.32m以上の不整形で井戸に切られている。深さは、0.2m須恵器の甕や高杯を出土した。もうひとつの土壌は、楕円形(0.86×0.38m)で深さ0.6mを測る。埋土は、暗灰色粘質土、須恵器の壺3、埴1、杯身1を埋納していた。特に杯身は、口径19.6cm高さ6cm、立ち上がり部高0.7cmの大型で全体の約半が残存していた。内外面にろくろナデを施し、底部はへら削りを行っている。この種の蓋杯は野洲川流域を中心に分布し、集落及びその周辺での出土が知られている。また包含層から須恵器(口径29cm)の杯蓋も出土しており、祭祀用の遺物と思われる。その他包含層から弥生時代中期の土器、平偏片刀石斧が出土しており当時から室町時代まで断続的に集落が営



土壌内遺物出土状況

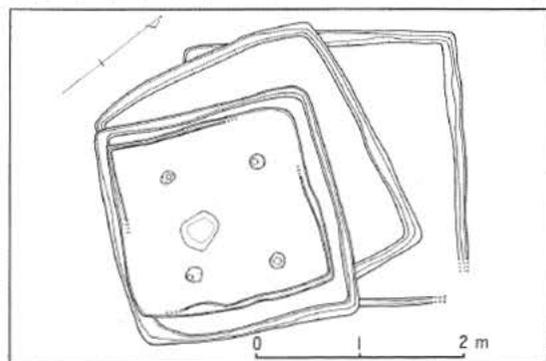
まれたと思われる。(中主町教育委員会 徳網 克己)

23. 古墳時代初頭の竪穴住居群

草津市下物町・芦浦町 檜皮堂遺跡

檜皮堂遺跡は、草津市下物町字檜皮堂および芦浦町字下笠に所在する遺跡で、かつて縄文式土器が出土し、注目されたことがあったが、本格的な調査がなされたことはなかった。

昭和59年3月に当地で倉庫建設が計画されたため、2次にわたり事前発掘調査を実施したところ、古墳時代前期から中期の竪穴住居跡および、奈良時代以降と思われる掘立柱建物跡が検出された。特に第2次調査で発見された竪穴住居跡は、4棟が重複して存在し、建て替えが行われたことを示している。規模は、最大が一辺5.2m、最小が一辺3.7mで、新しくなるほど大きくなる傾向がある。柱穴が確認できたのは2回目の住居で、中央に貯蔵穴と思われる小土壇が存在する。



竪穴住居跡

遺物は、庄内式新段階から布留式古段階と時期幅が狭く、一棟当りの存続期間を求めることができよう。この他にも、掘り下げは行わなかったが、調査区北隅より3棟以上切り合った竪穴住居が検出され、第1次調査と立会調査で確認されたものも合わせると、相当数の住居跡が存在するものと思われ、付近に竪穴住居集落が広がっていると推測される。草津市内では、野路岡田遺跡で中世集落に重複して竪穴住居2棟が検出されているが、他では明確に確認されているものがなく、集落として把握できたのは本遺跡が初めてである。

竪穴住居の他には、各調査で数棟の掘立柱建物跡が確認されているが、遺物はほとんど出土せず、時期決定は困難である。(草津市教育委員会 藤居 朗)

24. 弥生期の玉作り工房などを検出

草津市下物地先 烏丸崎遺跡

遺跡は、古い野洲川の南流が湖中にはり出した、草津市下物地先の烏丸崎を中心に広がる弥生時代前～中期の遺跡であるが、滋賀県教育委員会では、昭和59年

5月より当地の遺跡の実態を把握するため発掘調査を開始した。調査の原因者は水資源開発公団であり、当地が南湖浚渫の土置場に選ばれたためである。

遺跡は、烏丸崎の先端からその基部に及び、その面積はおよそ50,000㎡以上に達するものである。全面調査を実施している最先端の10,000㎡では、現在のところ2棟以上の竪穴住居跡兼玉作工房、23基以上の方形周溝墓群がある。

工房はその規模を知るための掘り下げしかしていないが、攻玉関係の遺物は数万点に及ぶとみられる。わけでも、管玉の未製品、類例の少ない角玉未製品、石錐(針)と呼ばれる穿孔器の先端部、さらに製作工程を示す原石、さらには石材を割るための石鋸などが多数出土している。原石は碧玉であり、石錐はメノウと頁岩である。また、石鋸は紅簾片岩であるが、これらはいずれも日本海側あるいは和歌山方面から入手されたものである。工房自体の掘り下げは目下計画中であり、年代の決定もその時点をまたなければならぬが、弥生中期の前半を下ることはない。

なお、工房をさけるように方形周溝墓が出土しはじめているが、現在までその掘り下げは実施しておらずその実態はさだかではないが、これらもまた散見される遺物から弥生時代中期を下るものではない。そして、試掘調査時におけるマウンドのたち割りから1基の木棺が検出された。棺は前後に木口板をもち底板、盖板、側板をもつものであるが腐朽したものが片側の側板は認められなかった。また、出土遺物も検出されなかった。

以上のように調査は目下進行中であるが、明瞭にマウンドや主体部を残す周溝墓の存在は注目すべきものである。さらに、玉作工房の存在は、大中の湖南遺跡や市三宅東遺跡に次ぐ発見であるが、ここではメノウ製石錐や角玉の存在など、近江玉作遺跡の最古の可能性とその系譜を暗示しており、玉を求めた支配者集団はいずこにあったのかを究明する手がかりさえ物語るものといえる。(滋賀県教育委員会 丸山竜平
・(財)滋賀県文化財保護協会 岡本隆子)



方形周溝墓群